

ETロボコン2020 チャンピオンシップ大会

JASAは2020年11月22、23日の2日間にわたり、「ETロボコン2020チャンピオンシップ大会」を開催しました。

例年は実際のコースでロボットを走らせる競技を行ってきましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、今年はオンラインで実施する運びとなりました。何と言っても、今回の大きなポイントは、ETロボコン実行委員会が開発した「ETロボコンシミュレータ」です。このシミュレータを存分に活かしたオンライン競技会の内容を中心にお伝えします。

「ETロボコンシミュレータ」は、実際のロボットやコースのサイズと重量を忠実に再現したこと、リアル開催と遜色ない仕上がりとなっており、多くの参加者から期待以上の出来栄えとお墨付きが出たほどです。実際の映像はYouTubeに大会の模様が公開されているので、ぜひ視聴してください。

<https://youtu.be/M4eNyIIBuzU>

チャンピオンシップ大会は、参加総数183チームの中から予選を勝ち抜いた50チームが出場し、例年と変わらず熱い戦いが繰り広

げられました。

今年から新設した設計技術の入門者向けのエントリークラスでは、接戦の中、モデル審査と競技の両成績が上位にランクされたOKIソフトウェア株式会社の「OSK」が初代王者(総合成績優勝)に輝きました。そして最も多くのチームが参加した激戦区、設計技術の基礎を学ぶプライマリークラスでは、幾多の強豪チームを差し置いて個人参加の大学生「鶴舞工業大学」が競技・総合優勝の二冠を達成しました。

設計技術の応用を学ぶアドバンストクラスでは、そうそうたる組込み系企業チームの猛者を押しのけ、京都府立京都高等技術専門校

システム設計科の「KAMOGAWA」がモデル審査・競技・総合成績の完全制覇の偉業を成し遂げました。

プライマリークラス、アドバンストクラスの王座には学生チームが名を連ねたのは明るい未来の証拠となる一方で、2021年は企業チームのリベンジが見られるのでは?と今から期待をしています。

「学びを止めてはいけない」を合言葉にオンライン開催で幕を閉じた2020年のシーズン。参加チームも実行委員会も手探りの中で始まり、なかなかうまくいかないことも多く、改めてリアル開催の価値とありがたみを再確認した反面、新しいマナビの世界が見え、参加チームの飽くなきチャレンジにと触れた二日間となりました。



2020 IoTイノベーションチャレンジ

IoTイノベーションチャレンジとは、これから業界を牽引できる人材の発掘・育成を目的とした人材育成コンテストです。企業経営の新基準、社会課題解決にむけた重要項目のSDGsの17の目標(169のターゲット)の中から課題を抽出し、IoTを活用したソリューションを企画します。

今回で3回目を迎えるIoTイノベーションチャレンジは、全国からこれまで以上に多様な背景を持つチームの参加を促すことを目的とし、デジタル開催へと変わりました。セミナー・アドバイザ(審査員・講師など)との相談会、公開プレゼンテーション審査、決勝大会などの全プログラムをオンラインにて実施し、参加チームは全国各地から参加しました。

<https://www.iot-innovation-challenge.biz/overview/>

今回は計28チームがエントリーし、書類審査とプレゼンテーション審査により、ファイナリストとして8チームが選出され決勝大会に進出。12名の審査員と、ライブ視聴者を前に熱いプレゼンテーションを繰り広げました。

ファイナリスト(登壇順)

1. Go To イノベーション(エヌ・ティ・ティ・コムウェア株式会社)
2. BULL (大旺工業株式会社*)
3. パシフィコシヨット(エプソンアヴァシス株式会社)
4. Break Bad(エヌ・ティ・ティ・コムウェア株式会社)
5. Dense(3k+1) (株式会社シーエーシー)
6. 松野谷 石角(株式会社クロスキヤット)
7. Chelsy (株式会社エクスマーション)
8. CimAsoC (株式会社シーエーシー)

決勝大会当日のプレゼンテーション終了後、チームへインタビューを行いました。

今回はコロナ禍で開催案を検討する期間

があつたため、スケジュールが詰まつてしまつた。そのスケジュール感について、「企画を考える時間を捻出するのが難しかつたが、オンラインツール等を活かして、集中して時間効率よく活動することができた」とのこと。

またオンライン実施ということで、「仮想背景は、チームのソリューションを際立たせるために使用した」と、チームならではの工夫点を話してくれるチームもいました。

初参加の方は、「今回取り組んでみて、



ET&IoT Digital 2020

ワークスタイルの変化に対応した新しい情報交流の形を提案

去る2020年11月16日(月)から12月18日(金)までの33日間、協会主催の組込みとエッジコンピューティング技術のアジア最大級の展示会「ET & IoT Digital 2020」がデジタルで開催された。

本展初の試みとなるデジタル開催では「エッジテクノロジー総合展」として、リアル展示会の雰囲気を模倣するのではなく、リアル展示会の利点を意識しつつもデジタル技術と融合させた新しい概念のプラットフォームを採用。来場者ごとに最適化された動画を中心としたコンテンツがSNSのようにタイムライン表示され、よりダイレクトに、興味とマッチする情報を共有。

今後ますます企業の戦略が重要となる「5G・ローカル5G」や「エッジ・セキュリティ」などの7つピックアップテーマで組込みとエッジコンピューティング技術の最先端の「今とこれから」の情報を発信し、のべ66,500人を超える来場者が参加。ワークスタイルの変化に

対応した新しい情報交流の形を提案することができた。

ニューノーマルに適合する非接触技術やセキュリティ関連の新製品、実用化直前の技術展示に特徴

今年は123の企業・団体が出展し、動画を中心としたコンテンツ数は400を超える規模で開催された。コロナ禍で注目の高いタッチレスの入力インターフェースやセキュリティ、ワイヤレスタグなどの展示が多く見受けられ、まさに実用化前夜とも言える技術を紹介し、ニューノーマルを見据えた各社の方向性や開発状況を示すことができた。

また、カンファレンスにおいても、「With/Afterコロナ」や「ニューノーマル」などのキーワードを交えた講演の人気が高く、まさにイノベーションの社会実装を加速させるエッジテクノロジーと新たなサービスの今後について注目度が高いことが伺えた。

カンファレンスはデジタル開催ならではの利点を發揮

デジタル開催により場所や時間の制約は



なくなった今回、最前線で活躍するビジネスリーダーや産官学の有識者が登壇し、「エッジ」の今と今後に切り込んでいく注目の技術、先進の応用分野について100を超えるカンファレンスを実施。好きな時間にいつでも視聴が可能となり、聴講者からは次回開催もオンラインを希望する声を多数いただき、満足度の高い情報を発信することができた。

in-t Review

SDGsをテーマとして扱う中で、どうやってビジネスに繋げのかを考えることが難しいと感じた。それが分かったことはとても良かったと思う」と、IoTイノチャレに参加したことでのことを話してくれました。

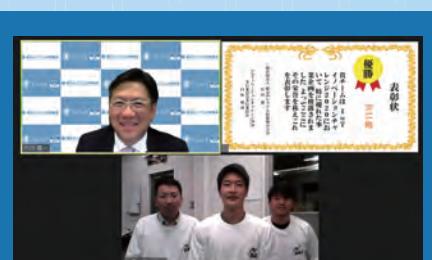
優勝したチームのソリューションは盲導犬に代わる斬新なアイデアで、IoTを通して盲導犬以上の使用メリットを生み出すものでした。言語ではなく音の高低で使用者に情報を伝達するため、海外での活用の広がりもあります。今

回IoTイノチャレへの参加は初めてでしたが、「優勝を目指して毎日取り組んでいました。評価されたことを嬉しく思う」と話してくれました。

また受賞したチームからは、「今回考えたソリューションについて審査員に多くの意見をもらったので、それを活かし、もっとより良いものとし、実現に向けて活動していきたい」など、今後の活動に繋げての意気込みコメントを貰いました。この中から社会実装されるアイデアが出ることを期待しています。

今回は初のオンライン開催でしたが、チームの個性を出しつつどうプレゼンテーションするか?等、リアル開催とは違った工夫が見られました。参加者がチーム全員で仮想背景を揃えたり、チームユニフォームを作成したりと、ソリューションの特徴やチームの一体感が際立ち、オンラインならではの熱気が伝わりました。

現在、来年度に向けニューノーマルな形の



・表彰結果

<https://www.iot-innovation-challenge.biz/final/>

【優勝】BULL(大旺工業株式会社*)

【準優勝】CimAsoC(株式会社シーエーシー)

【第3位】松野谷 石角(株式会社クロスキャット)

【審査員特別賞】Chelsy(株式会社エクスマーション)

【JASA特別賞】BULL(大旺工業株式会社*)

開催を企画中です。2021年2月17日に開催発表会を予定していますので、ぜひチェックしてください。

*大旺工業の「旺」は正しくは日偏に玉

